

日常生活圏域 サービス事業所の取り組み

地域の方とともにできること

訪問介護 ニチイ北山 住吉

徘徊を繰り返す認知症の方を在宅で支えていくにはどのように関わっていけば良いのか。今回の事例は「住み慣れた家で出来るだけ生活して欲しい」というご家族の強い思いがあり、ケアマネジャー・地域包括支援センター・訪問介護事業所・地域密着型通所介護事業所のチームで対応してきました。

超高齢のご夫婦で、訪問介護が関わり始めた当初はご主人がヘルパーの受け入れに難色を示され、その間にもご本人様の認知症が進行していくという状況でした。また娘様のご両親に対しての「安全に暮らして欲しい」という思いが強く、サービスが増えていく中でご夫婦には戸惑いが見られました。ヘルパーに対しても、ご夫婦から不満や「自分達は大丈夫、できています」との思いを訴えられる事もありました。

しかし、ご主人も「娘が勝手に引っかきまわしていく」と不満をおっしゃりながらも、デイサービスを利用されている時は「安心していられる」と話される事もあり、徐々に信頼関係を築くことが出来ているという実感がありました。

ご主人の協力が無ければ、万全な搜索体制を取っていても徘徊されるご本人様を見つけることは出来ません。しっかりした信頼関係を各関係機関がそれぞれご夫婦と築きながら、何かあれば駆けつける体制をとり、ご主人からも、ご本人様が外に出て行った時間をヘルパーに伝えてくださるなどの協力を得て、搜索することになっていきました。

サービスに入り始めた頃、住宅街の一角ということで近所の関係が希薄だ、とご本人が話されていました。今後は、個人情報の保護やご本人様たちのご近所関係、親子関係など様々な制約や課題のある中でサービスとなっていくと思いますが、ご本人様の笑顔が見られるようなサービスを地域で連携して提供できればと思います。

居心地のよい居場所づくり

ニチイケアセンター北山 生活相談員 高島博樹

平成24年度 生活圏域交流会第三弾は通所系サービス2事業所による認知症対応事例検討会でした。



今回の交流会の目標として・・・認知症の人が自宅以外で社会に接点を持つ場として通所系サービスがあります。自宅を第一の家とすると第二の家は、通所系サービス。認知症の人も自分の居場所のある第二の家が必要ではとの思いで、居心地の良い居場所づくりのために、どうすればいいのか？今後の学びの場にするため振り返りを行いました。



事例1 若年型認知症ケースの対応について

A氏女性(66歳)アルツハイマー型認知症 認知症の進行に伴って感情不安定、徘徊等の行動が繰り返されてきたことに対する取り組みが報告されました。その対応の中で1日100kmもドライブ対応することもあったそうで、受容・傾聴・共感という接し方の基本の大切さを実感したとの報告がなされ、私たちも実践された対応に感心し共感が広まりました。

また、Aさんからデイサービスは「みんなお年寄りばかり・・・」「ここはボケ老人ばかり・・・」という言葉が聞かれ、幅広い年齢層の方々やレベルの違う方々と、一緒に過ごしてもらうことの難しさを感じたとの振り返りがあり、このことはデイサービスの今後の大きな課題と言える問題提起されていました。

たとえばレクリエーションより「働ける場」のようなものを提供し、人と交流できるカフェやもの作りの場が必要ではとの感想は私たちにとっても考えさせられるところが多くありました。グループワークでの意見でも「その方自身からデイサービスに行きたいという人は少ない。」「何かその人の役割、居場所を見つけることが課題ではないか？」との意見がありました。

事例2 アルツハイマー型認知症ケースの対応について

B氏男性(90歳) 通所サービスを利用している中で、入浴を拒否する利用者は認知症の方に限らず多くあります。2事業所にまたがり、通所系サービスを利用している方で入浴拒否をしていた利用者が2事業所間の連携から入浴できるようになった事例が報告されました。この方は以前は徘徊を繰り返し、警察に通報された事もあったようです。

認知症が進行し自宅での入浴が困難になっている方にかかにして入浴して頂くか、ご本人に居心地の良い場で見られるかの取り組みが報告されました。

Bさんの思いとして「風呂は毎日家で入っている」